

## 第11章 地方暮らしの若者のバリエーションを捉える —青森20-30代調査と広島20-30代調査の比較から

轡田 竜蔵（同志社大学）

### 11-1. 広島20-30代調査から青森20-30代調査へ

2014年7月、筆者は公益財団法人マツダ財団の委託を受けて広島の2つの地域（広島都市圏の郊外にあたる「安芸郡府中町」と、広島県北部の中山間地である「三次市」）で、20～30代を対象に郵送調査を実施した（以下、広島20-30代調査。両自治体の住民基本台帳より無作為抽出で選ばれた各1500人、計3000人を対象に郵送し、867人から回答を得た）。この調査は、「地方圏」を一枚岩に捉えるのではなく、都市地理学でいうところの「都市雇用圏」概念をアレンジするかたちで、「地方中枢拠点都市圏」とそれに隣接する「条件不利地域圏」（すなわち地方圏の「まち—いなか」）を操作的に定義し、若者の実態と意識を比較検討するなかで、そのバリエーションを捉えようとするのが目的であった<sup>30</sup>。その結果は、2015年7月に『「広島20-30代住民意識調査」報告書（統計分析篇）』としてまとめ、マツダ財団より発行された。そして、そこからさらに分析を進め、インタビュー調査の結果を加え、理論的考察を踏まえたうえで、2017年2月に『地方暮らしの幸福と若者』（勁草書房）という単著にまとめた。

2017年3月、マツダ財団の主催で、この単著刊行を記念するシンポジウムが開かれた。このシンポジウムを契機に、関心のある社会学者・文化人類学者が集まり、「トランスローカリティ研究会」が立ち上げられた。そして、研究会として、広島20-30代調査の知見を他地域の調査を通して確かめ、若者問題の地域的なバリエーションに関する考察を深めることを目標として、今回の質問紙調査が企画され、マツダ財団の支援を得て実施された。2018年4月、質問紙調査は、青森県の八戸都市圏の郊外にあたる「上北郡おいらせ町」と、下北半島の北部にある「むつ市」で、広島と同じく、両自治体の20-30代の各1500人を対象に、郵送調査として実施され、計680票を回収した（以下、青森20-30代調査。この調査設計の詳細については、本報告書の羽瀧論文を参照）。

この共同研究において、轡田の担当は、広島20-30代調査と青森20-30代調査に共通する質問項目を取り上げ、4地域のデータを比較検討することである。この報告書原稿は、早期に集計結果を公表することを主目的とした「速報」としての意味があり、さしあたり単純集計レベルにおける4地域のデータの差異の意味について、最も重要なポイントを提示することを目標としている。したがって、それぞれの質問項目に規定力をもつ複数の変数について、「広島20-30代調査」で行ったような多変量モデルを使った検討結果については記述していない。その点については、今後発表予定の論文のなかで深める予定である。

本稿における統計データの分析結果の記述について最初に記しておく。4件法の質問項目については、質問紙にあるように「全くそう思う/どちらかというと思う/どちらかというと思うわない/全くそう思わない」にそれぞれ4・3・2・1点を割り当て、その平均値の差異について、一元配置分散分析もしくは「まち—いなか」「青森—広島」の二元配置分散分析を行い、4地域間の1%水準での有意差の有無を確かめている。また、クロス表の分析については、カイ二乗分析および各セルの残差分析を行い、その結果に基づいて記述している。本文中の記述は、全てこれらの検定手続きを経たものであるが、煩雑さを避けるために、簡略な記述にとどめている。また、わかりやすさを重視して、本文中では肯定的な回答（「4 全くそう思う」と「3 どちらかというと思う」）をした者の総計の比率を記述している。

<sup>30</sup> 「都市雇用圏」とは、DID人口が1万人以上（5万人以上のばあいは「大都市雇用圏」）の都市を中心都市とし、その中心都市への通勤率の高い（10%以上）郊外市町村を合わせた圏域のことを指す都市地理学の概念である。「地方中枢拠点都市圏」というのは、これをベースに拙著『地方暮らしの幸福と若者』のなかで定義した概念であり、大都市圏を除く都市雇用圏内の常住人口が30万人を越える都市雇用圏のことを指す。広島都市圏は140万人台の比較的大きな都市雇用圏であり、八戸都市圏は30万人台の小さな「地方中枢拠点都市圏」である。ちなみに、山陰地方や北東北には50万人台以上の「地方中枢拠点都市圏」は存在していない。具体的には、広島都市圏には広島市、廿日市市、安芸郡（坂町、熊野町、府中町）、安芸太田町、江田島市が含まれる。一方、八戸都市圏には、八戸市、おいらせ町、五戸町、南部町、新郷村、階上町、岩手県洋野町が含まれる。また、「大都市圏」「地方中枢拠点都市圏」の両方に含まれない圏域が、「条件不利地域圏」と定義する。

### ①地域特性の比較ポイント

下北半島の北部に位置するむつ市は、中国山地に位置する三次市との共通点が多い。どちらも人口は5万人台で、全域的な人口減少傾向は明らかである。むつ市も三次市も、平日生活圏に高等教育機関は無く、大学進学は地元外転出を意味するという点は同じである。そして、その中心市街地から最寄りの「地方中枢拠点都市圏」である八戸市・青森市、あるいは広島市の市街地に達するまでに、2時間程度を要する。休日には行くことができるかもしれないが、一般的には通学・通勤は困難な距離である。2地域とも、都市機能の集積したエリアへのアクセスという点で、条件不利性を抱える「いなか」であることは明らかである。

「三次市」と「府中町」



「むつ市」と「おいらせ町」



三次市の場合は、その居住地域の特性は、市内唯一のDID（人口集中地区）を含む中心市街地（4つの小学校区）と、それを取り巻く広大な農山村地域に分けることができる。むつ市についても同様に、平成の大合併前の「旧むつ市」についてはその人口の大半がDIDに含まれるとみられ、DIDの面積規模は三次市とあまり変わらない。周辺に、中心市街地をはるかに上回る面積の農山漁村や山林（旧脇野沢村、旧大畑町、旧川内町）によって取り囲まれている点も同じである。

ただし、むつ市と三次市の間には、地域特性の違いもある。三次市の農山村地域（中心市街地の4小学校区以外）については、近代以前より続く村落の風景が広汎に残っていて、広島20-30代調査でも農山村地域の人口の割合は3割程度と多い。これに対して、旧むつ市の場合は近代以降に農地開拓や鉱業などで流入した人口が大半を占めており、それらの衰退とともに周辺地域の人口は著しく減少し、現在では大半の人口が中心市街地である旧むつ市に集中している状況がある。また、旧むつ市のなかでも、その郊外にあたる大湊中学校区については、自衛隊の官舎が立地しており、単身の20代男性が偏在しているという特殊事情があるので、分析のさいにはその点に注意してみる必要がある。



八戸市工業地帯から八甲田山を望む（手前丘陵部の向こうがおいらせ町）



広島駅前から府中町方向（丘陵部手前の住宅地）

その一方、八戸市に隣接したおいらせ町を、広島府中町と同じ地方中枢拠点都市圏＝「まち」の事例として捉えることには、異論もあろう。確かに、それぞれ八戸市と広島市の平日生活圏、都市雇用圏に含まれるという意味において、いずれも都市圏の「郊外」とみなしうが、その都市圏の規模については大きく異なる。広島都市圏は140万人台であるが、八戸都市圏は30万人台にとどまり、就学や就職の選択肢という点でもかなりの格差がある。また、府中町とおいらせ町とでは、どちらも都市圏の中心からのアクセスは変わらないとはいえ、土地利用のされ方が大きく異なっている。府中町は広島市の中心から続く市街地の延長線上に立地しており、高度経済成長期から開発された瀬戸ハイムなどの団地を含む「東部」と、広島中心部に近く、新しい住宅供給がある「西部」も含め、居住可能地域は全面的に都市化している。これに対して、おいらせ町の場合は、スプロール型に開発されている住宅地ないしニュー

一タウンが点在しているものの、東の「旧百石町（町東部）」についていえば、大半が伝統的な農村集落という状況であり、町内にDID（人口集中地区）は存在していない。拙著『地方暮らしの幸福と若者』で示した基準からすると、八戸都市圏は、総人口では30万人を越えているという点で、地方中枢拠点都市圏の定義を満たすが、中心都市である八戸市の人口が30万人に満たず（22万人）、その求心力は広島と比べて弱いと考えられる。

しかし、その一方で、それでもここで定義した意味において、「地方中枢拠点都市圏」と「条件不利地域圏」という概念区分にこだわるのは、それが地方圏の若者の暮らしのあり方のバリエーションとして最も重要な分断線であると考えたからである。その理由としては、以下の三つの点が重要である。

第一に、それぞれの県内でほとんどの地域人口が減少傾向にあるのに対して、調査地として取り上げた青森のおいらせ町と広島の府中町については、現状維持もしくは微増傾向にあるという点である。おいらせ町は八戸市中心部まで車で30分程度と近い郊外であり、この関係は府中町と広島市中心部との関係と似ている。それぞれの都市圏のベッドタウンとして、おいらせ町には三沢市にも近い「旧下田町（町西部）」の木ノ下小学校区など、ニューファミリー向けの新しい住宅供給が比較的盛んな地域もある。農村地帯にある甲洋小学校区と下田小学校区では人口減少が課題になっているが、全域的に人口減少が進んでいる条件不利地域圏とは状況が異なっている。

第二に、おいらせ町も府中町も、自治体のなかに都市圏全体の消費秩序において大きな意味を持つ巨大ショッピングモールが立地しているという点である。おいらせ町には旧下田町にイオンモール下田が、府中町には広島市に近い西部にイオンモール広島府中があり、それぞれ生活密着型GMSとしてのイオン直営店のほかに、多くの若者が利用するような専門店を100店舗以上備えている。この規模のショッピングモールは30万人以上の商圏があるところではなければ立地しないという意味で、全国の「地方中枢拠点都市圏」の重要なメルクマールとみなしうる。これに対して、三次市には「サングリーン」と「プラザ」、むつ市には「マエダ本店」という生活密着型のショッピングセンターがあるが、若者や子育て世代が魅力を感じるような消費・娯楽の場としては機能していない。このほかにも、若者が集まる都市的な場所の選択肢について言えば、おいらせ町は八戸市に、府中町は広島市の中心市街地に出ればいくらかあるが、むつ市や三次市には、中心市街地の一部の飲食店に限られる。



三次市中心市街地



三次市周辺部（三次市の大半は農山村地域）



むつ市中心市街地（旧むつ市）



廃校舎が目立つむつ市周辺（旧川内町。むつ市街地から車で約1時間）

第三に、条件不利地域圏の人々は、休日には、かなり頻繁に、平日生活圏を越えて、隣接する地方中枢拠点都市圏に移動しているとみられる点である。若者の旺盛な消費・娯楽のニーズを満たすためには、居住地域の生活では物足りないからである。具体的には、三次市からイオンモール広島府中へ、むつ市からイオンモール下田へのそれぞれ約2時間をかけた移動は、特に若者にとって日常的となっているとみられる。三次市と府中町、おいらせ町とむつ市との間には、それぞれに、こうした「まち—いなか」間のトランスローカルな移動関係があることが想定される。

こうした理由から、本稿においては、広島と青森の調査データを比較することをとおして、「まち—い

なか」関係を主軸として捉えるモデルの妥当性を確かめる。ただし、地方圏の若者のバリエーションが、すべて「まち—いなか」関係から分析しきることはできないだろう。そのため、本稿では、若者問題の地域特性をつかむという目的に向かって、4つの地域のデータを比較しながら、他の分析軸が持つ意味についても探っていきたいと思う。

- 1・広島「府中町」と「三次市」で見られたような「地方中枢拠点都市圏—条件不利地域圏」の関係性、すなわち地方圏の「まち—いなか」関係の構造は、青森の「おいらせ町」と「むつ市」との間においても同様に見られるのであろうか。
- 2・若者の社会的属性あるいはその現状評価や価値観に関して、「広島—青森」の間の地域差としてみなしうる点は何か。その地域差は、どのような要因によるものと考えられるのか（都市圏の規模、大都市からの距離、社会規範、土地利用のあり方等）。
- 3・若者の暮らしの地域差を探るうえで、何が明らかになったか。今後の研究プロジェクトにおいて、こういった課題が考えられるか。

## 11-2. 基本属性の地域比較

### (1) 就業構造、世帯年収、就労時間、家事時間

就業構造に関しては、「まち—いなか」の違い、すなわち地方中枢拠点都市圏（おいらせ町、府中町）とそれぞれに隣接する条件不利地域圏（むつ市、おいらせ町）の差異が明らかに出ている。

就業状態についてみると、正規雇用の比率は、むつ市64.2%（男性77.8%、女性48.0%）、おいらせ町67.5%（男性79.6%、女性56.6%）、三次市52.0%（男性68.4%、40.7%）、府中町48.6%（男性74.3%、女性33.7%）。男性に関しては三次市がやや低いが、これは自営業者が比較的多いためである（三次市12.8%に対して、むつ市3.3%、おいらせ町3.8%、府中町1.4%）。女性の正規雇用の比率は、広島2地域は青森2地域に比べて低くなっている。これは、専業主婦の比率が広島2地域（三次市21.6%、府中町31.4%）が青森2地域（むつ市14.7%、おいらせ町8.6%）よりも高いことと連動している。

業種について、4地域の差異として一番目立つのは、製造業と回答した者の比率である。青森調査では、おいらせ町が12.0%を占めるのに、むつ市では3.9%しかいない。一方、県間の政府統計の比較では、製造業が比較的強い広島でも、府中町が17.0%を占めるのに対して、三次市は11.0%と比較的少ない。製造業の比率の差という点では、「まち—いなか」格差が大きい。ただし、府中町では、製造業でも専門・技術職や事務職が多いとみられ、製造作業・機械操作従事者の比率については4地域に有意差は無い。

雇用先のバリエーションが少ない分、条件不利地域圏では公務員比率が高くなるという点にも注目できる。この点、むつ市には、自衛隊関係の施設があるということもあって、23.8%という突出した値を示している（自衛隊を除くと、公務員比率は半分近くになる）。

このほか、青森2地域と広島2地域で差が出ているのが、建設業従事者の比率である。青森2地域（むつ市9.6%、おいらせ町7.7%）は、広島2地域（三次市4.1%、府中町4.7%）よりその比率が高い。また、職業の種類についても、建設作業従事者は、青森2地域（むつ市5.6%、おいらせ町5.3%）は、広島2地域（三次市1.9%、府中町2.2%）と一致する。こうした傾向についても、政府統計の県別データと同様である。

また、世帯年収の平均値（各ケース値を各階級の中央値に置き換えて算出。「1000万円以上」については1100万円として算出）について見てみると、「まち—いなか格差」、すなわち、条件不利地域圏の2地域（むつ市502万円、三次市506万円）と地方中枢拠点都市圏の2地域（おいらせ町572万円、府中町543万円）との間に有意差がみられる。その一方で、青森2地域と広島2地域の差は無く、「まち—いなか」格差のほうが見えやすいことが確認できる。

就労している者についての週当たり平均就労時間については、むつ市45.8時間、おいらせ町45.6時間、三次市42.6時間、府中町42.1時間となっており、青森2地域のほうが長い。これは、女性の正規雇用の比率の違いによるものである。男性に限ると、むつ市49.9時間、おいらせ町48.6時間、三次市48.4時間、府中町50.1時間で4地域の間には有意差は無い。女性については、むつ市39.9時間、おいらせ町42.7時間、三次市36.2時間、府中町36.1時間となっており、青森2地域は女性の正社員率が高い分、就労時間も長めになっている。なお、週60時間以上の長時間労働者の数字には有意差は無く、男性に限ると、むつ市24.9%、おいらせ町21.3%、三次市23.6%、府中町28.0%。政府の労働力調査に基づく都道府県比較では大都市圏のほうがやや高い割合となっているが、本調査の結果を見る限り、地方圏の4地域の労働時間が短いとは決して言えない。

一方、家事時間については、男性についてはむつ市8.7時間、おいらせ町8.2時間、三次市7.3時間、府

中町8.9時間で4地域に有意差は無い。一方、女性についてはむつ市27.2時間、おいらせ町23.6時間、三次市34.6時間、府中町40.2時間となっており、広島2地域のほうが青森2地域より長い。これは、広島2地域の専業主婦率の高さによって説明できる。

## (2) 家族構成の違い

次に、家族構成の違いに関するデータを比較してみたい。この点については、「まち—いなか」の差異よりもむしろ、広島2地域と青森2地域の違いが目立っている。その意味するところが家族規範の地域差であるのか、都市化の度合いの違いであるのかについては慎重に見極める必要がある。また、各自治体内の地域特性による違いも考慮して、比較する必要がある。

国勢調査データの推移をみると、近年、東日本の生涯未婚率が高まっており、青森県も生涯未婚率の上位県となっていることがわかる。それに対して、広島県の未婚率は全国平均を下回っている。本調査については、パートナーがいる者（この論文では、法律婚だけではなく、婚約、事実婚関係にある者を含めた数字を用いている＝以下、「有配偶者」）の比率の差は、国勢調査以上に顕著になっている。20代での比率は、青森2地域（むつ市69.3%、おいらせ町82.8%）が広島2地域（三次市57.0%、府中町62.9%）より高い。30代についても差がついている（むつ市38.9%、おいらせ町33.7%、三次市27.7%、府中町18.6%）。このように青森で有配偶者率が低くなっている背景として、直系家族制の強い地域のほうが結婚に求められるハードルが高いという仮説が考えられる。ただし、この点を明らかにするには、本調査のデータでは不十分であり、ここでは深入りを避けておく。

また、この有配偶者率に関するデータでは、「まち—いなか」の違いにも注目できる。20代では条件不利地域圏（むつ市、三次市）のほうが高いのに対して、30代になると地方中枢拠点都市圏（おいらせ町、府中町）の自治体のほうが高くなっているという点である。「いなか」では同級生ネットワークを中心とした早婚傾向があり、その一方で、「まち」では、30代の若い子育て世代向けの住宅供給が比較的多いためであると考えられる。

4つの地域の配偶者がいない者の親との同居率を比較すると、むつ市62.2%に対して、三次市65.7%、府中町70.2%の3地域に有意差は無いが、おいらせ町の比率が85.5%と高い。むつ市や三次市は、周辺の村落地域においては、親との同居率が高いが、中心市街地については都市部と遜色なく若者の単身世帯が多い。いくつかの事情が考えられるが、一つには、周辺農山村出身者が交通事情の悪さゆえに、雇用のある市中心部に単身で賃貸住宅に住む者が多いということが考えられる。また、府中町の場合はマンションやアパートが多く、単身者向けの住宅も豊富だが、おいらせ町の場合はファミリー向けの一戸建て物件ばかりで、単身者向けが乏しい。府中町もおいらせ町も比較的住宅供給の多い地方中枢拠点都市圏の郊外であるのだが、都市化の規模の違いと関係し、住宅供給のあり方に違いがある。

4つの地域の有配偶者の親もしくは配偶者の親との同居率を比較すると、むつ市17.6%、おいらせ町25.4%、三次市23.9%に比べて、府中町は5.8%とその低さが際立っている。これに関しても、都市化の規模が大きく影響していると見られる。府中町は完全に都市化している郊外であり、結婚後の親との同居の規範は弱い。これに対して、おいらせ町は同じ郊外といっても、伝統的農村地帯を多く含む。特に、おいらせ町の旧百石町については35.1%と非常に高い値を示し、旧むつ市以外の農山漁村地区33.0%、三次市農山村地区では47.1%と比べて遜色ない。伝統的な農山村地域については広島も青森も関係なく同居規範が比較的強いということであろう。ただし、その一方で、これまでにマクロデータから議論されてきたように、広島と青森の間にある家族規範の地域差の影響の可能性も排除できない。この点について、各自治体のなかで、比較的新しい住宅供給が多い地区を比較してみると、解像度が上がる。三次市中心市街地が13.4%であるのに対し、同じ程度に市街地化している旧むつ市（大湊地区を除く）で17.6%、イオンモール周辺のおいらせ町の旧下田町でも21.8%と高値になっている。この違いは、青森のほうが広島よりも直系家族制を背景にした親との同居規範が強いという意味であることも考えられる。

## (3) 学歴・居住歴

学歴は、在学中の者を除き、大卒・短大卒以上の学歴を持つ者の比率について言うと、むつ市32.4%、おいらせ町33.4%、三次市44.0%、府中町60.3%。全体として青森2地域（むつ市、おいらせ町）のほうが広島2地域（三次市、府中町）より高学歴層が少ないのは明白である。これは、マクロな全国統計とも一致する。都市圏内の大学・短大の選択肢の幅の違いはもちろんあるが、先行研究では東京や関西からの距離の違いの影響が指摘されている（北海道・東北・九州・沖縄は大学進学率が低い）。府中町から通える範囲の広島都市圏には、銘柄大学の選択肢こそ少ないが、約20の大学・短大がある。これに対して、おいらせ町は八戸都市圏に含まれるわけであるが、都市圏内には私立大学が2つあるだけ

である。そのため、広島の2地域とは異なり、学歴に関する「まち—いなか」格差は、青森の2地域の間には見られない。

居住歴に関して、「今住んでいる地域が「地元」であり、他の地域で暮らしたことがない」人の比率は、むつ市23.7%、おいらせ町24.4%、三次市11.1%、府中町26.2%。どの地域についても少数派となる。この中では、都市度が最も高い府中町については比率が高めであるが、4つの地域のどこでも、地元外で暮らした経験がある人が30代で8割程度になるという点では変わりはない。「ずっと地元」にいる者については、府中町では60.9%が大卒・短大卒以上であるが、他の地域についてはほとんどが非大卒・非短大卒である（むつ市0.0%、おいらせ町16.0%、三次市10.0%）。これは、府中町以外については、実家から通える範囲に通える選択肢がほとんどないことを意味している。この点において、同じ地方中枢拠点都市圏といっても、おいらせ町と府中町とのあいだで、都市雇用圏の規模の違いの差が大きいといえる。

地元へUターンした者の比率は、おいらせ町の35.8%に対するむつ市の43.9%、府中町の15.4%に対する三次市の40.2%は高く、「まち—いなか」格差が見られる。条件不利地域圏では、就学や就職などの選択肢が乏しいので、押し出されるようにいったんは地元外に出るしかないのだが、地元の親や友人ネットワークへのアクセスも考えて、Uターンする誘因が地方中枢拠点都市圏よりも強くはたらくとみられる。また、学校を卒業もしくは中退後にUターンした者については、4地域ともその6割以上は大卒・短大卒以上である。これに対して、転職でUターンをした者については、広島（府中町、三次市）では大卒・短大卒者が多いが、青森（おいらせ町、むつ市）は非大卒・短大卒の比率が高い。

結婚で転入した者の比率について、広島に比べて青森の2地域の比率の低さが目立つ。地区別にみると、さらにこの点は鮮明になる。三次市中心部で21.8%、府中町西部では25.1%を占めるのに対して、旧むつ市（大湊中学校区を除く）ではわずかに5.5%、比較的新しい住宅供給がある旧下田町（おいらせ町）でも12.9%にとどまっている（そのかわり、旧下田町は既婚者が78.6%を占める「住み替え」を理由とする転入者が21.4%と、全4地域のなかで最も多い）。また、結婚で転入した者については、広島（府中町、三次市）では大卒・短大卒者が多いが、青森（おいらせ町、むつ市）は非大卒・短大卒の比率が高い。

居住歴に関する質問の回答から、4地域の「地元」在住者の割合を比較してみた。その結果、20代ではむつ市68.8%、おいらせ町72.5%、三次市56.1%、府中町60.9%。30代では、むつ市71.0%、おいらせ町56.8%、三次市49.3%、府中町33.7%である。

この数字からは、二つの点に注目ができる。第一に、「まち—いなか」の違いである。青森でも広島でも、20代では地方中枢拠点都市圏（おいらせ町、府中町）のほうが「地元」率が高いが、30代では逆に条件不利地域圏（むつ市、三次市）のほうが「地元」率が高くなっている。条件不利地域圏では、10～20代の就学や就職を契機に「地元」を離れる比率も多いが、その一方で、30代までにUターンする層が少なくないためである。卒業（中退）後Uターンした人々の比率はむつ市24.3%に対しておいらせ町19.9%であり、また、就職後にUターンした人々の比率はむつ市20.1%に対しておいらせ町15.7%と、いずれもむつ市のほうが多い。三次市の府中町に対する関係も同様で、条件不利地域圏においてはUターン層が全体の多数を占めている。第二に、青森の2地域のほうが、広島2地域よりも「地元」率が高くなっている点に注目できる。この点については、単に都市化の度合いによるものではないと考えられる。「地元」率が高い各地域の農村地区を除いて、比較的新しい住宅供給のある市街地を中心とする地区に限って比較しても変わらないからである。むしろ、先に指摘したように、結婚転入者の比率の低さによって、青森の2地域は広島2地域よりも「地元」率が高くなっているのだと考えられる。

### 11-3. 現状評価に関する項目の地域比較

#### (1) 地域に関する現状評価—圧倒的な「まち—いなか」格差

本調査においては、三次市とむつ市を「条件不利地域圏」の事例として、府中町とおいらせ町を「地方中枢拠点都市圏」の事例として、広島20-30代調査で見られたのと同様の回答傾向がみられるかどうか一つの注目点であった。

分散分析をした結果、意識調査項目の平均値の有意差の有無について、三次市と府中町の関係は、むつ市とおいらせ町との関係と基本的には同じであった。かなり強い意味において、「まち—いなか」格差が出ている。

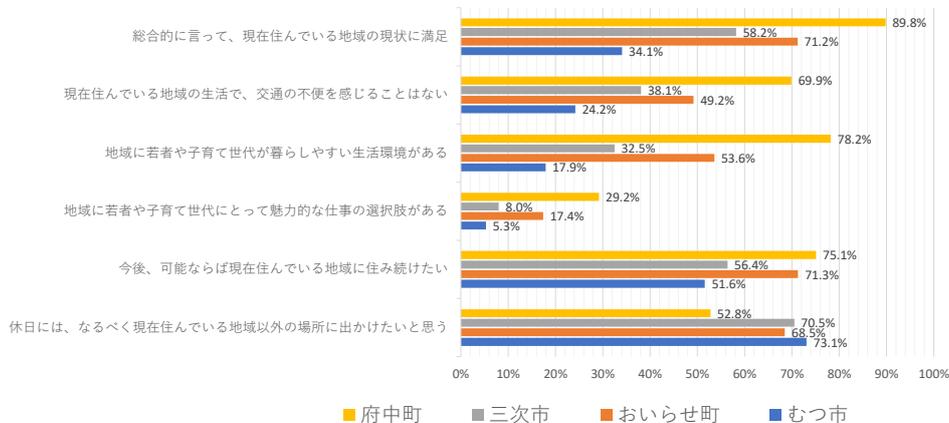
まず、地域に関する現状評価項目について。総合的に見て、「現在住んでいる地域の現状に満足している」のは、むつ市34.1%に対して、おいらせ町71.2%。おいらせ町のほうがむつ市よりも圧倒的に現状評価が高い。「現在住んでいる地域には、20～30代の若者や子育て世代が暮らしやすい生活環境が整っている」と思う者についても、むつ市は17.9%ときわめて少ないのに対して、おいらせ町は53.6%と半

数を上回っている。広島20-30代調査でも、地域の現状評価については、広島市へのアクセスが良い府中町の値は、三次市をはるかに上回っている。このほか「現在住んでいる地域には、20~30代の若者や子育て世代にとって魅力的な仕事の選択肢がある」者は、おいらせ町が17.4%と低いが、むつ市はそれよりもさらに低く、わずか5.3%にとどまっている。また、「今後、可能ならば、現在住んでいる地域に住み続けたいと思っている」のも、むつ市は51.6%と値が低く、おいらせ町71.3%に比べると定住意識が低いとみられる。このような点についても、広島20-30代調査の三次市と府中町との比較と同様である。「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたいと思う」人の比率についても、むつ市73.1%に対しておいらせ町68.5%は低く、三次市70.1%に対して府中町52.8%と低いと同様である。条件不利地域圏の若者のほうが、地方中枢拠点都市圏の若者よりも休日に積極的に地域外に出る意欲を持っているという意味で、ここでも「まち—いなか」格差を確認できる。

世帯年収の平均値についても、先にもみたように、青森と広島のあいだではなく、「まち—いなか」格差がある。ただし、広島20-30代調査と同様に、世帯年収や学歴、性別等の主要な社会的属性が地域の現状評価の規定要因となっているわけではない。決定的な意味を持つのは、都市機能の集積地域へのアクセスの格差であるとみられる。じっさい、「現在住んでいる地域での生活で、交通の不便を感じることはない」と考える人は、広島20-30代調査では三次市38.1%、府中町69.9%と著しい違いがあったが、青森20-30代調査においても、むつ市24.2%、おいらせ町49.2%と大差がある。

そして、ここに挙げた地域の現状評価項目のすべての平均値について、「地方中枢拠点都市圏」の2地域（おいらせ町、府中町）の値が、「条件不利地域圏」（むつ市、三次市）の2地域の値をはるかに上回るという明瞭な結果が出ている。これら4地域の調査から全体を語ることは慎重であるべきだが、少なくともこれらの結果からは、地域の現状評価の現状評価の違いは、青森と広島の違いによるものではなく、「まち—いなか」格差によって説明される部分が多いという仮説を支持しているといえるだろう。

## 地域に関する現状評価



### (2) 生活満足度—地域満足度とは関係無し

このように、地域の現状評価項目について、「まち—いなか」格差は大きい。しかし、興味深いのは、それにも関わらず、その他の主題の現状評価に関わる意識調査項目のすべてについて、「まち—いなか」格差がみられなかったという点である。この点においても、青森20-30代調査と広島20-30代調査は一致している。

まず、「総合的に見て、今の生活に満足している」のは、むつ市60.4%、おいらせ町65.9%。広島20-30代調査の三次市70.2%は、府中町68.4%であり、4地域のあいだに有意差は無い。むつ市や三次市の地域に対する評価の低さは、個人の生活満足度には関係していないのである。

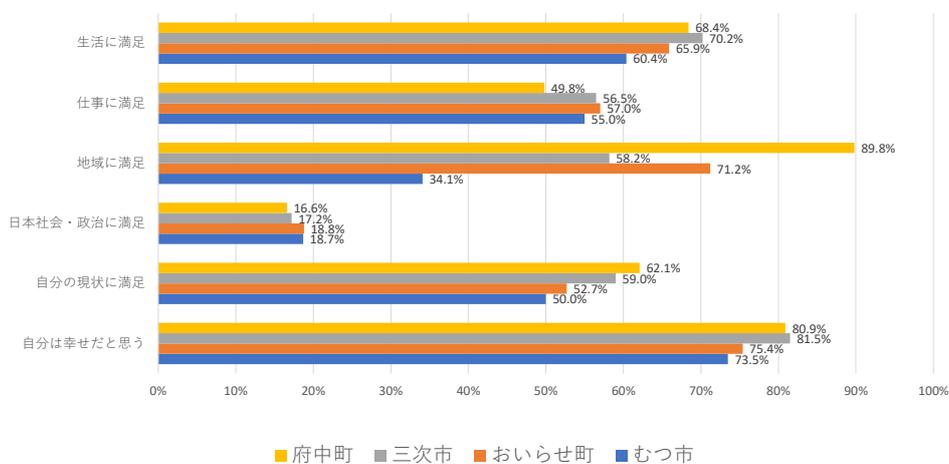
そして、先に確認したように、世帯年収に関する「まち—いなか」格差は有意であるのだが、これが生活満足度の格差には結びついていない。「一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は高いほうだ」と考える人の比率について、4地域間の有意差は無く、階層意識の地域間格差は見いだせなかった。また、「金銭的余裕のある生活を送っている」と思っている者の割合において、4地域のあいだに有意差は無

いことからすると、「まち」と「いなか」の間にみられる世帯年収格差は、必ずしも経済格差の感覚には結びついていないと考えられる（むつ市34.1%、おいらせ町33.4%、三次市34.4%、府中町43.3%）。

経済的な感覚に関する項目は、いずれをとっても4地域の差異は見いだせない。「20年後、自分は親の生活水準よりも高い暮らしができていると思う」者の比率は3割前後、「今後、自分の生活が経済的に厳しくなる可能性について、心配しなくていいと思う」者の比率は2割前後と、どの地域でも同様に経済状況に対する評価は一律に低い。

また、「毎日の生活が「楽しい」と感じられる」人の比率については、青森の2地域（むつ市57.8%、おいらせ町59.1%）は、広島の2地域（三次市67.9%、府中町70.4%）よりも低い。ただし、これは、有配偶者の比率の差によって説明される差である。配偶者がいる者については、むつ市71.1%、おいらせ町67.6%、三次市77.9%、府中町78.6%で有意差は無い。配偶者がいない者に限定すると、むつ市44.6%、おいらせ町51.8%、三次市52.2%、府中町55.3%と、むつ市がやや少ないが、その他の3地域については有意差が無い。

## 暮らしや人生の総合評価



14

### (3) 仕事の現状評価—「まち—いなか」格差は見られず、低めの評価

先に、「魅力的な雇用」の有無に関しては、むつ市・三次市のほうが、おいらせ町・府中町よりも厳しい評価が出ていることを確認した。しかし、「総合的に見て、自分の仕事の現状に満足している」者の比率については、4地域の間には有意差は見られない（むつ市55.0%、おいらせ町57.0%、三次市49.7%、府中町47.7%）。広島20-30代調査の場合には、女性に限れば仕事満足度は三次市のほうが府中町よりも高いという結果が出たが、青森20-30代調査においてはおいらせ町とむつ市の間で有意差はみられなかった。「給料や報酬に満足している」「毎日の仕事が「楽しい」と感じられる」など、仕事に関する現状評価のすべてについて、4地域の間には有意差の見られる項目は無かった。

生活に関する項目と同様に、仕事についての現状評価は、4地域とも同様に低い数値を示している。

「今後の自分自身の仕事の将来について、明るい希望を持っている」者はいずれも3割台、「今後の勤務先の将来（経営など）について、明るい希望を持てると思う」者については3割前後にとどまっている。ただし、「現在の職場の人間関係について満足している」者は3分の2程度と多数を占め、「自分は「やりがい」がある仕事をしていると思う」者の比率も4地域揃って6割台であり、比較的ポジティブな評価となっていると言える。

### (4) 社会の現状に対する評価—地域差無く、厳しい評価

「総合的に見て、日本社会や政治の現状について満足している」者の比率については、4地域の数値はほぼ同様で、10%台のきわめて低い数値を示している（むつ市18.7%、おいらせ町18.8%、三次市17.2%、府中町16.7%）。「日本の将来には明るい希望があると思う」者の比率も4地域とも2割台にとどまり、有意差は無い。その評価はかなり厳しいものであるといつてよいだろう。

「将来、原発事故の影響で、自分が被害者となる可能性について、心配しなくていい」と考える者について、4地域ともわずかに1割台。他の自治体とは異なり、むつ市は原発関連施設が立地する地域で

あるが、地域性とは関係なく、原発事故の不安を感じる者の比率の高さは変わらないということがわかった。

社会の現状評価に関するそのほかの項目についても、「まち—いなか」の差異や、「青森—広島」の有意差はみられなかった。「日本は、こつこつと努力すれば成功するチャンスのある国だと思ふ」人の比率は、4地域とも半数を上回る5割台と比較的高い。また、「日本は、安全で安心して暮らせる国だと思ふ」人の比率も、4地域とも7割前後と高い。日本社会の将来への不安は強くても、現状の社会秩序に対する信頼が崩れるほどではないということがわかる。その一方、「日本は差別があまりなく、弱い立場とされる人々がむしろ手厚く保護されていると思ふ」人の比率は4割台であり、評価が分かれている。

また、「国を愛する心をしっかり持とうと心がけている」者は6割前後、「社会問題や政治に関心があり、知識を得ようと心がけている」者は5割台で、4地域の有意差は見られない。社会や政治に関する現状評価や価値観について、目立った地域差は無いと結論できる。

#### (5) 人生に対する評価—4地域の有意差なし

「自分は幸せだと思ふ」人の比率については、むつ市73.5%、おいらせ町75.4%、三次市81.5%、府中町80.9%で、4地域の間には有意差は無い。「自分の将来に明るい希望を持っている」という人の比率についても同様である（むつ市51.2%、おいらせ町53.5%、三次市53.1%、府中町55.9%）。そして、人生の価値観に関する質問項目においても、すべてについて4地域の間には有意差は確認できない。

ただし、「総合的に見て、自分の現状に満足している」人については、青森の2地域の比率（むつ市50.0%、おいらせ町52.7%）のほうが広島の2地域（三次市59.0%、府中町62.1%）よりも低くなっている。ただし、この差異は、広島のほうが青森よりも有配偶者率が高いことによるものであって、配偶者（パートナー）の有無によってクロス分析すると地域差は解消する。配偶者がいない場合、現状評価は低く出る傾向にあり、4地域の有意差は無い（むつ市39.6%、おいらせ町47.7%、三次市47.7%、府中町48.6%）。

#### (6) 家族・友人関係についての評価—4地域とも高評価

「家族との関係に満足している」人の比率について、4地域ともいずれも8割台の高い値を示し、有意差は見られない。配偶者（パートナー）の有無に分けてみても、変わりはない。配偶者が無いと回答した人のなかで、「血縁以外に自分を必要とし大切に思ってくれる人（配偶者・恋人等）がいて、その関係に満足している」のは、むつ市34.0%、おいらせ町38.9%、三次市42.7%、府中町37.8%で、やはり有意差は無い。「今後、（配偶者がいない場合）結婚できないのではないかと、（既婚の場合）結婚生活を続けられないのではないかと、心配しなくていいと思ふ」人の比率についても、配偶者がいない場合について、むつ市35.7%、おいらせ町39.3%、三次市31.5%、府中町35.7%とやはり差はみられない。4地域において、配偶者がいない者は、6割台の者が「結婚できないのではないかと」心配している現状がある。同じく配偶者がいない者について、「20年後、子育てを経験し、配偶者と暮らしていると思ふ」は、むつ市48.1%、おいらせ町51.6%、三次市56.2%、府中町52.1%で、大きな差はない（30代に限ると、4地域とも3割台以下となる）。結婚に関する将来不安について、4地域の差は数字としてはみられない。

「友人関係に満足している」人の比率について、4地域はいずれも8割前後の高い値を示し、有意差は見られない。「自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けていると思ふ」人の割合についても、同様である。「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている」については、むつ市（41.2%）よりもおいらせ町（45.0%）の比率のほうが高く、これは三次市（32.3%）よりも府中町（35.7%）のほうが高いのと同様で、「まち—いなか」格差が関係あると考えられる。また、この項目について、青森のほうが広島より高い数値を示している点であるが、居住歴による格差が目立ち、「ずっと地元」層に限るとこの差は無くなる（むつ市27.9%、おいらせ町32.5%、三次市26.5%、府中町38.5%）。

「現在住んでいる地域には、リラックスして付き合える関係の友人が多くいる」者の比率については、むつ市48.0%、おいらせ町48.9%、三次市43.5%の間には有意差は見られず、府中町39.9%だけがやや低い。府中町には結婚を理由に転入した層（その多くは専業主婦）が多いが、この層については、この項目の評価は25.2%と低いためである。この質問項目について、一般に、転入層についてはネガティブな評価が出る傾向が強い。その点を制御すると、4地域の間には比率の差はみられない。

#### 11-4. 価値観に関する項目の地域比較

##### (1) 地域活動・社会活動と地域コミュニティについての価値観

地域活動・社会活動に関して、青森20-30代調査と広島20-30代調査では、「積極的参加」「一般的参加」「消極的参加」「不参加」の4段階で尋ねている。それぞれ4・3・2・1点を割当て、4地域の参加度について比較分析した。

何らかの地域活動・社会活動について「積極的参加」がある者の比率は、むつ市27.0%、おいらせ町28.4%、三次市34.8%、府中町26.4%で、三次市がやや多めである。活動ごとに見てみると、「地縁組織の活動」あるいは「業界団体・同業者団体・労働組合の活動」に関しては、都市度の高い府中町の値がやや低く出ており、これに対して「条件不利地域圏」であるむつ市と三次市の高さが目立つ。また、「趣味活動」について、三次市の参加度が他の3つの地域よりもやや高いが、他の3地域について有意差はみられなかった。「ボランティア団体・消費者団体・NPO等」への参加度については、4地域のあいだで有意差は無かった。これらの参加度を規定する要因については、学歴、居住歴、配偶者や子どもの有無などの社会的属性が複雑にかかわっており、さらに検討する必要がある。

「隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい」人の比率は、むつ市42.8%はおいらせ町38.8%より高く、三次市49.1%も府中町46.8%より少し高い。この点を見ると、「いなか」のほうが「まち」よりも近隣の相互扶助規範があるようにも見えるが、地区別にみると、三次市の中心市街地を除いた農山村地域が50.6%と最も高いのに対して、むつ市の農山漁村地域（旧むつ市以外）では30.4%にとどまっている。広島と青森で農山漁村のコミュニティのあり方に違いがある可能性が考えられる。

また、「今後、地域活動に積極的に参加したいと思っている」のは、三次市が45.6%と比較的高く、これに対してむつ市36.7%、おいらせ町38.4%、府中町38.1%はあまり差が無い。こうしたデータから、三次市の地域活動・社会活動の活発さがうかがえる。三次市については、UIターンの大卒者が地域活動の核となっていることがわかっているが、その要因に関して、さらに学歴や居住歴などの他の変数との関係を分析する必要がある。

また、「現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある」人の比率については、4地域とも40%前後で、有意差が無い。ただ、「現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が増えることは良いことだ」と思う人の比率が、むつ市60.3%、おいらせ町64.8%、三次市55.2%でこの3地域については有意差が無いが、都市部において最も外国人比率が高い府中町において43.2%と低くなっていることに注目できる。「まち」のほうが「いなか」よりも「多様性」に寛容というわけではないということである。

##### (2) ライフスタイルについての価値観

「自分が一生暮らす場所として、××のような田舎はいいと思う」という質問について、青森では「下北半島」、広島では「中国山地」と入れて尋ねている。むつ市は下北半島にあり、三次市は中国山地にある。その結果は、当然ながら「まち—いなか」格差がみられ、三次市とむつ市が高くなるのだが、三次市のばあいは66.1%と高いのに対して、むつ市は58.0%と大差がついている。「非地元」在住者に限ると、三次市は60.8%と高いのに対して、むつ市42.4%と、この差はさらに広がる。また、この質問について、府中町が40.5%あるのに対して、おいらせ町は30.1%とさらに低くなっている。この結果は、むつ市のばあいは転勤以外のかたちで転入してくる層が少ないという事実に対応していると言える。「下北半島」と「中国山地」との間には、田舎暮らし志向の若者をひきつける求心力において、現時点で差があるといえる結果ともいえるだろう。

「自分が一生暮らす場所として、××のような地方都市はいいと思う」という質問について、青森では「青森市」、広島では「広島市」と入れて尋ねている。その結果は、むつ市70.9%、おいらせ町62.5%、三次市65.3%、府中町92.1%。三次市については「田舎」と「地方都市」の評価がほぼ同程度であるが、他の3地域については、「田舎」「大都市」と比べて、「地方都市」を理想とする者が圧倒的に多数を占めることがわかる。何よりも、下北半島にあるむつ市の若者が、居住地域である「下北半島のような田舎」よりも「青森市のような地方都市」のほうを12.9ポイントも高く評価しているという点に注目したい。ちなみに、この質問について、おいらせ町の値が低くなっているが、これは、おいらせ町が八戸都市圏にあり、青森都市圏との関わりはむつ市以上に薄いものであるということを示す結果であろう。4地域比較という点を考えれば、質問紙で「青森市」としたことはワーディング上のミスであり、「八戸市」であったとしたら、この質問についておいらせ町の20-30代の肯定的回答のポイントはかなり高くなったのではないかと考えられる。

「自分が一生暮らす場所として、東京のような大都市はいいと思う」のは、4地域とも3割以下で、

大都市志向は地方志向や田舎志向に比べると圧倒的に弱いことがわかる。ただし、4地域を比較してみると、青森の2地域（むつ市26.3%、おいらせ町19.0%）の比率は、広島2地域（三次市12.0%、府中町16.3%）よりも高く、特にむつ市の高さが目立つ。この違いは何を意味するのかわかり、さらなる分析を要する。むつ市と三次市、おいらせ町と府中町の東京への時間距離は、それぞれそれほど大きく変わるものではない。だが、太平洋ベルトに属する広島の場合、東京に至るまでに京阪神や名古屋といった求心力の大きい大都市圏があるのに対して、青森と東京の間には、広島と同程度の規模の仙台都市圏くらいしかない。広島における「東京」の意味は、青森に比べて小さいものであるとも考えられる。

「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたいと思う」人の比率については、「いなか」のむつ市が73.1%、三次市が70.5%と高いのに対して、地方中枢拠点都市圏のおいらせ町68.5%、府中町52.8%は低い。「いなか」の地域に暮らす若者は、「まち」に暮らす者よりも積極的に居住地域外に出る傾向があることを示す数字である。また、「現在住んでいる地域に、大型商業施設や大型小売店が増えれば嬉しく思う」人の比率については、都市度が高い府中町が68.1%と最も少ない。三次市81.6%とおいらせ町81.3%が同じ水準で、むつ市91.1%が最も高くなっている。都市度の低い地域、あるいは「いなか」の若者のほうが、利便性の高いライフスタイルを渴望する傾向の現れであると考えられる。

このほか、「現在住んでいる地域での生活には、自家用車は欠かせないと思う」人の比率について、むつ市、おいらせ町、三次市が100%に近い人たちが「欠かせない」と回答しているのに対して、府中町では63.4%にとどまっている。府中町もおいらせ町もともに都市郊外であるが、全面的に都市化している府中町では、広島の中心部に移動する電車やバスなどの公共交通機関の便利が良い。ところが、おいらせ町では、自家用車への依存率がきわめて高い。車にどの程度依存しているかという点について、府中町とそれ以外の3地域との間には大きな違いがある。

### (3) 生活と仕事に関する価値観

仕事や生活についての価値観に関する項目を見てみると、青森とくにむつ市と広島2地域との間で、若干の差異が見られる。

「満足な収入が得られるのであれば、長時間働いてもかまわないと思う」のが、むつ市56.8%、おいらせ町53.6%、三次市49.7%、府中町47.7%。その一方、「やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわないと思う」のは、むつ市は23.5%で、他の3地域（おいらせ町27.1%、三次市30.8%、府中町30.4%）より低い。そして、「やりがいのある仕事のためなら長時間働いてもかまわない」という者の比率は、むつ市44.2%、おいらせ町37.9%、三次市44.7%、府中町47.1%。おいらせ町がやや低い。これらの結果は、青森の2地域のほうが広島2地域よりやや多いが、これは青森の正規雇用の比率の高さに対応している。さらに、むつ市のほうがおいらせ町よりも収入が低いこともあり、「収入のための仕事」を重視する価値観が4地域のなかでは若干強いとみなすことができる。

ただし、「余暇の生活を優先させたいので、仕事で長時間働きたくない」人の比率については、4地域はいずれも7割前後が肯定的な回答をしており、有意差は見られない。「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくても仕方ない」と考えるのも、4地域とも有意差は無く、同程度にネガティブである（むつ市37.6%、おいらせ町35.2%、三次市41.1%、府中町40.2%）。「自分なりに楽しくお金をかけずに暮らす方法はあるので、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」者も4地域とも20%前後と変わらず、拙著『地方暮らしの幸福と若者』でも指摘したように、昨今の移住ブームのなかで言われるような「ダウンシフター的な生き方」を志向する者は、決して多数派ではないということが4地域に共通する事実として確認される。

ジェンダーや家族に関する規範についていうと、「まち—いなか」格差ではなく、「青森—広島」の地域差がみられる項目がいくつかあった。「男性も女性と平等に家事（育児・介護を含む）を分担するのが当然だと思う」のは、青森の2地域（むつ市87.7%、おいらせ町85.2%）が広島2地域（三次市80.4%、府中町85.1%）よりも高い。また、「親は要介護になったら、子どもが家で面倒をみるのは当然だと思う」のは、逆に広島2地域（三次市58.0%、府中町62.4%）のほうが、青森の2地域（むつ市46.1%、おいらせ町47.5%）より比率が高い。また、「家事（育児・介護を含む）の負担に関する不満はない」比率は、青森の2地域（むつ市71.1%、おいらせ町72.9%）のほうが、広島2地域（三次市66.9%、府中町68.2%）よりもやや高い。これらを共通して説明する背景として有力なのが、青森のほうが女性の正規雇用率が高く、広島の専業主婦率が高いという傾向である。ここでは、これ以上立ち入ることを控えるが、それに関わる家族規範の地域差が存在する可能性についても考えられる。ただし、「女性は子どもができて、ずっと職業を続けるほうがいい」と思う人の比率は、4地域とも6割台であり、この点において地域によるジェンダー規範の違いがあるとは言えない。

趣味については、「自分の趣味には「おたく」的な要素があると思う」者の比率が、青森の2地域で

はむつ市50.9%、おいらせ町44.8%と高いのに対して、広島は2地域は三次市36.8%、府中町36.0%と低い。この差を説明する最も大きな要因は、先に見たように青森の2地域では、男性で配偶者がいない者ないし男性子無しの比率が比較的高いためである。「男性子無し」に限ると、むつ市56.4%、おいらせ町58.9%、三次市55.0%、府中町54.2%と4地域の有意差はなくなる。ただし、「女性子無し」については、青森の2地域（むつ市54.7%、おいらせ町52.0%）は、広島は2地域（三次市44.2%、府中町36.5%）に比べると高く、趣味の中身やあり方について地域差があることがうかがえる。

また、「自分の趣味には「ヤンキー」的な要素があると思う」者の比率は、むつ市8.8%、おいらせ町11.4%、三次市5.7%、府中町5.7%。青森の2地域のほうが、広島は2地域よりも高くなっている。業種では、4地域とも全業種のなかで、建設業が最も「ヤンキー」的と回答する者の比率が多く、青森県の建設業従業者の比率の高さが全体の比率に影響している。

そして、「自分は趣味に関して、個性やこだわりが強いほうだと思う」者の比率は、やはり青森の2地域（むつ市58.5%、おいらせ町54.5%）のほうが、広島は2地域（三次市48.7%、おいらせ町46.1%）よりも高くなっている。この点についても、青森の男性子無しの比率の高さから説明できる部分が多いと見られるが、趣味の中身やあり方についてさらに検討をしてみる必要があり、この統計からだけでは判断できない。

また、「自分は趣味に関して、個性やこだわりが強いほうだと思う」という項目は、広島20-30代調査と同様に、少数派である「自分の一生暮らす場所として、東京のような大都市はいいと思う」という質問項目との相関が強い。「東京志向」のある者に限ってみると、「趣味に個性やこだわりが強い」のは、4地域とも各地域の平均値を上回る（むつ市60.5%、おいらせ町65.2%、三次市57.4%、府中町58.5%）。趣味へのこだわりと大都市志向との相関を示す、示唆的な数字である。

## 11-5. 総括

### (1) 「まち—いなか」関係

広島と青森の計4地点における20-30代調査を経て、地方暮らしの若者のバリエーションに関して、どのような示唆が得られただろうか。本稿で述べた、データ分析結果のポイントについて、本章末尾の表にまとめた。

まず、都市雇用圏概念をベースとした「地方中枢拠点都市圏—条件不利地域圏」（「まち—いなか」）の差異や関係性の重要性が改めて浮き彫りになった。

おいらせ町には、むつ市や三次市にもあるようなDID（人口集中地区）は無い。生活インフラへアクセスするためには、基本的には自動車での移動が必須であるという点において、府中町ともライフスタイルは異なる。豊富な雇用を提供する大企業があるわけでも、社会的に注目を集めるような行政施策や地域活動があるわけでもない。町内の面積のかなりの部分は農地であり、そこだけに注目すれば紛れもない「いなか」である。しかし、今回の調査において、地域の現状評価に関しては、おいらせ町は、どの項目をとっても肯定的な評価が「条件不利地域圏」であるむつ市や三次市をはるかに上回っている。おいらせ町にはある程度の雇用のバリエーションを提供する地方都市（八戸市）へのアクセスと、若者にとって魅力的な消費・娯楽機能を備えた100店舗以上の専門店を含む大型ショッピングモールがあり、それがむつ市とは決定的に異なる点である。こうした調査結果について、広島20-30代調査と青森20-30代調査の結果は完全に一致している。地域満足度のバリエーションは、居住地域の都市度や土地利用のあり方ではなく、若者にとって魅力的な都市機能の集積した地域へのアクセス格差、すなわち地方の「まち—いなか」格差によって説明できる部分が大きいということが改めて確認された。

また、もう一つ重要なのは、居住地域の現状評価に関して、これほどはっきりと「まち—いなか」格差があるにも関わらず、そのことが個々人の生活や仕事、人生の現状評価、そして幸福度の低さを意味しないという点である。地域に関わる問題を除けば、4地域の現状評価に関する項目において、基本的に有意差はみられなかった。また、「まち—いなか」の間で、世帯年収に有意差があるにもかかわらず、両方の地域の個人の経済状況の評価には差は無かった。この点についても、広島と青森の調査結果から得られる知見は一致する。これらの事実から、以下の三つの示唆が得られる。

第一に、条件不利地域圏（「いなか」）の地域的な衰退が問題とされているが、個々人の暮らしや仕事の現状評価に焦点を合わせれば、それは必ずしも「まち」に比べて低いものではないという点である。友人や家族などのつながりに対する評価は高いが、個々人の生活や仕事、そして社会の将来についてはネガティブな意識が強くなるという点で、4地域の間には有意差は無かった。

第二に、若者の暮らしやネットワークが居住地域のなかで完結していない点である。むつ市や三次市では、「ずっと地元」を離れたことが無い若者はごく一部であり、就学や就職のために他地域に転出したのちにUターンした者が最も多い。また、むつ市や三次市では、そのライフスタイル観は必ずしも「田舎

志向」が多数を占めるわけではなく、利便性の高い生活を求める傾向はむしろ「まち」よりも強い。そのため、多くの若者は、休日には、居住地域を越えて、2時間先のおいらせ町のイオンモール下田や、さらにその先の八戸都市圏や青森都市圏に移動している者も多いことが確かめられた。むつ市や三次市の若者たちは、個人的なモビリティを活用することにより、こうしたトランスローカルな関係性を維持することによって、地域の条件不利性を克服している場合が多いとみられる。すなわち「条件不利地域圏」に暮らす若者の生活や人生等の現状評価を捉えるうえでは、居住地域内の生活だけではなく、その平日生活圏の外側にある「地方中枢拠点都市圏」とのトランスローカルな関係性を分析することによってはじめて総体的な理解ができるということである。

第三に、4地域のデータを比較してみても、個々人の生活や仕事や人生の見通し、日本社会の評価についていえば、「まち」も「いなか」も「青森」も「広島」も関係なく、総じてネガティブであり、その一方で、家族や友人などの人間関係については比較的ポジティブであるという点について、有意差が見られなかった点である。これらの論点について、地方暮らしの若者の数値としてのバリエーションは無い、ととりあえず結論できる。ただし、ここで出た数値が、今回比較対象として除外している三大都市圏に暮らす若者と比べて、その実態や価値観がどのように異なっているのだろうか。世帯年収の水準でいうと、日本の中央値は「地方中枢拠点都市圏」にあると考えられるが、この点についてより高い水準にあり、専門・技術職の比率や学歴等がより高い大都市圏の若者との比較は、検討課題として残る。

## (2) 「青森—広島」の差異の意味

今回の調査データの分析からは、地方の「まち—いなか」関係だけでなく、青森の2地域と広島の2地域との間の差異についても多くの示唆が得られた。

第一に、本州の北端にあたる青森の2地域と、西日本の広島の2地域とでは、地理的な意味において、大都市圏へのアクセスに大きな差異がある。そのため、青森は広島よりもかなり学歴が低くなっている。また、Iターン、特に結婚を理由して転入する層が、青森は広島よりも圧倒的に薄いことも、大都市からの距離に関係していると考えられる。田舎暮らしのライフスタイルを求める者は一定数いるが、「下北半島」は「中国山地」より求心力を持ち得ていない。じっさい、移住・定住化政策において自治体関係者に尋ねたところ、むつ市ではIターンよりもUターンの増加を重視しており、さかんにIターン移住者を誘致しようとしている三次市とは異なるようである。

第二に、家族構造・人口構造において、青森と広島にいくらかの差異が見られた点である。そのなかでは、青森は結婚転入者が少ないぶん、「地元」在住者の比率が高く、有配偶者の比率も広島よりも低くなり、そのことが各種の意識調査項目における地域差につながっているという部分大きいということがわかった。ただし、東西日本の家族規範の違いが残っている可能性も否定しきれない。今回の調査ではそこまで踏み込めていないが、こうした家族構造・人口構造のあり方の違いが、若者の暮らしや人生の地域差とどのように結びついているのかについて、今後深めるべき課題は多いと考えられる。

第三に、30万人台の八戸都市圏と、140万人台の広島都市圏との間にある都市規模の差異が持つ意味である。おいらせ町と府中町を比較すると、大型ショッピングモールの存在がある点では似通っており、消費・娯楽機能とそれがもたらす満足度の高さという点では決定的な格差は無い。しかし、大きく異なるのが学歴と雇用の選択肢である。広島都市圏と比べて、八戸都市圏には高等教育機関が乏しく、18歳の時点で地元を離れる者の比率が格段に高いとみられる。また、都市圏の人口規模と相関するかたちで、産業構造においても差異がみられる。広島都市圏には多数の雇用をもたらす製造業の大企業の立地があるが、八戸都市圏では製造業の雇用が比較的少ない分、建設業や公務員の比率が高くなっている。また、八戸都市圏のほうが広島都市圏よりも就業機会が限られるぶん、雇用の柔軟性に乏しく、その結果として正規雇用で働く者の比率が高くなっている。それにともなって、女性の労働時間は長く、家事や介護に関するジェンダー意識についても違いがみられる。こうした点については、「まち—いなか」の違いよりも、「地方中枢拠点都市圏」の規模の違い、あるいは大学や企業の集積の度合いが意味を持っているとみられ、さらなる分析にあたっては、どこで線引きするかについての議論が必要と考えられる。

## (3) 今後の調査研究の課題

以上みてきたように、一言で地方圏と言っても、「まち—いなか」の格差やトランスローカルな関係の構造を理解する必要があること、そして、地方の「まち（地方中枢拠点都市圏）」といってもそのバリエーションを分析的に見る必要があるということが本調査をとおしてわかった。この結果を踏まえて、若者の暮らしの地域性を分析するという実践的課題も視野に入れた場合、以下のような調査研究の必要性があると考えている。

第一に、単に居住地域に愛着を持ち、定住人口を増やして地域を活性化することをゴールと定めるの

ではなく、地域的制約にうまく対応しながら、個々の若者が排除されない居場所や他者とのつながる場をみつけ、暮らしやキャリア、そして人生の選択肢を広げることがゴールであるという認識が必要である。そのためには、本稿が注目した地域間の差異だけではなく、個々人の職業・学歴・居住歴・婚姻状況・経済状況などの社会的属性の差異に着目しつつ、それと地域的課題との結びつき方についての考察を深める必要がある。そのためには、統計調査だけでなく、フィールドワークやインタビューの成果も踏まえて、地方暮らしの若者が抱える問題の共通性とバリエーションを探り、一般性のあるかたちで若者問題の地域性格を明るみにする調査研究の蓄積が求められるだろう。

第二に、上記の目的を達するためにも、本調査から導かれたキーワードである「まち—いなか」の「トランスローカリティ」の意味を明確にするべく、さらに調査研究を深める必要がある。「トランスローカリティ」とは、個々人の居住地域を越えた人間関係、社会経験のことを指す。広島と青森の調査を通して、地方圏の若者において、「ずっと地元」である若者は少数派であり、他地域の生活経験が大きな意味を持っていると考えられること、そして条件不利地域圏の若者のネットワークは、隣接する地方中枢拠点都市圏に広がっており、それによって地域満足度と生活満足度との間にあるギャップを埋め合わせている側面があることが示唆された。そのうえで、青森と広島の違いについての考察を通して、「まち—いなか」関係のバリエーションも見えてきた。今後、「まち—いなか」の関係を、「地方中枢拠点都市圏—条件不利地域圏」として一般化するだけでなく、「いなか」に近接する都市圏の規模による求心力の違いに注目するとともに、大都市圏との関係性の違いに注目し、「大都市圏—地方圏」とのあいだのトランスローカリティのあり方にどのような意味の違いが出てくるのかについても、考察を深める必要がある。そして、地域特性を捉えつつ、地域を越えたトランスローカルな関係性のなかから学び合うことは、若者の居場所の構築という実践的課題に関わる人たちにとっても、重要な契機を与えるものだと考える。

(表) 青森と広島の4地点比較のデータ分析結果のまとめ

\*地方中枢拠点都市圏(まち:おいらせ町・府中町) / 条件不利地域圏(いなか:むつ市・三次市)

<p>地方圏の「まち—いなか」格差 (都市機能の集積した地域へのアクセス格差)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・製造業(まち&gt;いなか)</li> <li>・世帯年収(まち&gt;いなか)・・・いなかでは「収入のための仕事」意識が強くなる。</li> <li>・有配偶者率:20代(まち&lt;いなか) / 30代(まち&gt;いなか)</li> <li>・学歴(都市圏の規模が大きい場合 まち&gt;いなか)</li> <li>・「ずっと地元」比率(まち&gt;いなか)</li> <li>・「地元」比率(20代:まち&gt;いなか 30代:まち&lt;いなか)</li> <li>・Uターン比率(まち&lt;いなか)</li> <li>・地域満足度(まち&gt;&gt;&gt;いなか)・・・定住意識、生活環境評価 ⇒利便性志向(まち&lt;いなか)</li> <li>・モビリティの意識(まち&lt;いなか)・・・休日に居住地域外に出る意欲</li> <li>・異質な人たちとの出会いの可能性(まち&gt;いなか)</li> </ul>
<p>青森—広島の差異</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●大都市圏からの距離</li> <li>・学歴(青森&lt;広島)</li> <li>・大都市志向(青森&gt;広島)⇒趣味へのこだわりの格差</li> <li>●ライフスタイルの差異</li> <li>・田舎志向の比率(青森&lt;広島)⇒「下北半島」は「中国山地」よりIターンを引き寄せていない。</li> <li>●家族構造・人口構造の差異</li> <li>・有配偶者の比率(青森&lt;広島)⇒自称「おたく」比率 / 「毎日の生活が「楽しい」と感じられる」人の比率</li> <li>・専業主婦比率(青森&lt;広島)⇒家事時間格差</li> <li>・結婚転入者(青森&lt;広島)⇒「地元」比率(青森&gt;広島)</li> <li>●「地方中枢拠点都市圏(まち)」の都市規模の差異(八戸都市圏30万人台&lt;広島都市圏140万人台)</li> <li>・都市度:府中町&gt;むつ市・おいらせ町・三次市・・・有配偶者の親もしくは配偶者の親との同居率の低さ / 「地縁組織」の活動参加の差異(府中町は少ない) / 外国人の増加への危惧感の差異 / 自動車依存度の差異</li> <li>・学歴(広島都市圏では「まち&gt;いなか」、八戸都市圏ではその差異無し)</li> <li>・土地利用の違い(府中町は都市化した郊外、おいらせ町は伝統的農村のなかでのスプロール型開発が進む郊外)</li> <li>●産業構造の差異</li> <li>・正規雇用比率(青森&gt;広島)⇒就労時間格差 ・・・女性の正規雇用比率の格差⇒男女平等意識(青森&gt;広島) / 「家」で介護する意識(青森&lt;広島) / 家事分担への不満(青森&lt;広島)</li> <li>・就業の選択肢の差異 製造業(青森&lt;広島) / 公務員(青森&gt;広島) / 建設業(青森&gt;広島)⇒自称「ヤンキー」の比率</li> </ul>
<p>4地域に差異無し</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経済的な感覚</li> <li>・生活の現状評価</li> <li>・仕事の現状評価は比較的低い</li> <li>・日本社会の現状評価・・・かなり低い</li> <li>・人生に対する現状評価</li> <li>・家族・友人に対する現状評価・・・8割は満足</li> <li>・仕事よりも余暇という価値観</li> <li>・ダウンシフター志向はネガティブ</li> <li>・社会意識</li> <li>・女性の職業継続を支持する意識・・・6割台</li> </ul>